

# “Cat in the Rain” に潜む不安定さとそれが内包するもの

坂 田 雅 和

〔抄 録〕

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の短編 “Cat in the Rain” (1924) には、これまでにまだ解き明かされていない謎が散見される。

先行論文においていくつかの謎は検討されているが、こと猫の特定化においては決定的な解釈はいまだ出されていない。

本論ではこの猫の特定化は猫を表現する不安定さ、そして猫に隠されたものがあるがゆえ謎のままで漂うものなのか、あるいは作者ヘミングウェイによる、短編であるがゆえの作成手法であるのか、精査して検証する。

併せて作品の中の妻の心の変化、妻を表す表現の数々、そして、この作品の書かれた1920年代という時代的背景と、その時代を生きた作者の軌跡をたどることにより、作者がこの作品に埋め込んだもの、そして内包されているものを猫の同定化と併せて子細に迫ってみる。

**キーワード** Cat、Rain、猫の特定化、内包、不安定さ

## はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の長編『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932) に、“If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader” (192), という、いわゆる「氷山の理論」という考え方が示されている。今村楯夫は、この「氷山の理論」を「これは一般に『氷山の一角説』と呼ばれ、この創作法はヘミングウェイ『省略の理論』として知られている。可能な限り、文を削ぎ落とし、簡潔に表現しようとした」(『言葉』171) と、解説している。ヘミングウェイのこの考え方をふまえて、短編「雨の中の猫」(“Cat in the Rain,” 1924) のネコを特定化し、そしてそれが内包しているものを考えたいと思う。

この作品は1,100語程度のきわめて短いものであるので、一語一語の使われ方が非常に重要になる。作品のあらすじは次のようになる。一組のアメリカ人の夫婦がイタリアのホテルに滞在している。雨の中、妻は窓から階下で見かけたテーブルの下にいた猫が欲しくて、探しにゆ

くがその猫の姿はみあたらない。夫は、妻の願望をよそにベッドの上で本を読んでいるだけである。ホテルの支配人やメイドは、妻に対して万全のサービスを提供し続けようとする。妻は夫にどれほど自分が猫を欲しがっているかを説明するも、夫に面倒臭がられる。妻が猫を探すという行動に、メイドも支配人も手落ちがないように、そして従順に常に妻の手助けをする。そして、最後は支配人の指示によりメイドが三毛猫を妻のところに持ってくる。

## Ⅰ. 「猫」の特定化について

まず、作品のタイトルの“Cat in the Rain”であるが、catであれば、冠詞aもしくはtheが付くと考えるのが順当である。あるいは、冠詞がないのであれば、catsと複数形にするべきだろう。ところが、タイトルが“Cat in the Rain”となっているので、そのタイトルには、座り心地の悪い椅子に腰をかけたような何とも言えない不安定な感じがぬぐいきれない。

ところで、作中の猫について、今村楯夫は「猫について、猫がどこに、どのように消えたか、ということをもヘミングウェイは一つ語っていないのだから、それはそのまま、ただ消えた、という事実のみを読者は知ればいいのだ」(『猫と女たち』107)と指摘する。また、「最初の猫とメイドが持ってきた猫は同じではない」(『猫と女たち』117)とも指摘している。

最初に出てくる猫とメイドが持ってくる猫は、はたして同じ猫なのか、あるいは今村が言うように違う猫なのか。つまり、最初に二階から妻が見たという、雨に濡れないようにしている猫と最後にメイドが持ってくる三毛猫が同じであるかという点において、諸説ある。ジョン・ハゴウピアン (John V. Hagopian) はたぶんちがう猫である (232) と述べている。浅若裕彦は議論するまでもなく、違う猫であることは明らかである (20) と述べている。カルロス・ベーカー (Carlos Baker) は同じ猫だと指摘している。古樋直己は連れてこられた猫が、子猫でなかったことは、妻にとって自分の見た猫と同一か異なるのかというよりも、自分の中で理想化された猫と違っていたことが重要なのである (93) と述べている。同氏は特定化までは述べていない。デヴィッド・ロッジ (David Lodge) は断定が出来ない (11) と述べている。ロッジの説について、大沼雅彦はロッジの説に軍配を上げざるをえない (『文法的一面』92)、また後の論文で、諸説の中では、ロッジの説に首肯しうる点のある (『文法再論』48) と述べている。この様に、これまでに決定的な解釈は出されていない。言い換えれば、作者ヘミングウェイは、どちらの解釈も出来るような曖昧な書き方をしているのだ。

この猫の特定化の困難さは、作品のタイトル“Cat in the Rain”から受けた不安定さと共通の根から生まれていると考えられる。つまり、タイトルのcatに冠詞がついていないこと、あるいはcatsとなっていないことは、作者ヘミングウェイが猫の特定化を困難にしているのと同じ意図から出ていると考えられる。

さらにこの種の不安定さを表現しているものとして、妻に対する表現の変化がある。妻の表現としては、まず最初にthe American wife (p.91, l.18; 22) が2回あり、次にthe wife (p.

92. 1.2; 5; 8) が3回あり、the American girl (p.92, 1.27; 36. p.93, 1.2) が3回ある。そして、the girl (p.93, 1.4) が1回あり、最後のページでは his wife (p.94, 1.8; 12-13) が2回ある。

アメリカ人の妻を、「アメリカ人の妻」と「その妻」から、「アメリカ人の若い女性」と「その若い女性」と呼称を変えることで、作者はこの妻が内面的に大人から若い女へと変わったことを暗示しようとしている。そして最後に「その若い女性」から「彼の妻」へと変わったことは、この妻が若い女性から大人の女性にその内面において変わったことを暗示している。換言すれば、作者がその妻を心理的に不安定な女性として描こうとしていることがわかる。

次に猫の kitty と cat という呼称についても、やはり不安定さを表現している。kitty という語を『ジーニアス英和大辞典 第5版』、『プログレッシブ英和中辞典 第5版』、『リーダーズ英和辞典 第2版』、『ランダムハウス英和大辞典 第1版』、『Webster's New World Dictionary』で調べると、「子猫」あるいは「猫」をあらわしている。cat は猫科猫族の動物の総称である。つまり cat は猫全体の総称であり、kitty はその猫全体の中で「子猫」あるいは「猫」を意味する。この作品の中に kitty が現れるところが以下のようにある。まず、that kitty (p. 91, 1.22) が1回、that poor kitty (p.93, 1.15) が1回、the poor kitty (p.91, 1.25) が1回、a poor kitty (p.93, 1.16) が1回、a kitty (p.92, 1.32. p.93, 1.36. p.94, 1.4) が3回で、kitty は合計6回表れる。

次に cat は以下のように表れる。a cat (p.91, 1.19. p.92, 1.27; 28; 30. p.94, 1.10; 11) が同じ行に2回表れるのを含めて9回、the cat (p.91, 1.20. p.92, 1.15; 23. p.93, 1.9) が4回、a big tortoise-shell cat (p.94, 1.17) が1回で、cat は計14回出てくる。

kitty は「夫と妻の会話」と「メードと妻の会話の中」に現れる。一方 cat は「情景描写の中」、「メードと妻の会話の中」、そして「妻と夫の会話の中」に現れる。少なくとも p.92 1.26 までは、同じ猫を kitty と cat で表している。しかも the American wife と the American girl の会話の中で kitty と cat がともに使われている。これもヘミングウェイが、猫を特定のイメージで描こうとしていないことを表している。言い換えれば、猫のイメージの不安定さを意図していると考えられる。その不安定さは、前述のとおり、この作品の中で妻を表す表現が、the American wife、the American girl、the wife、the girl の4種類に分かれているのと同じであると考えられる。

さらに kitty につく指示語と形容詞をみると、上で示したように、指示語 that がついているところが2か所と、形容詞 poor がついているところが3か所ある。詳しくみると、1回目の that kitty (p.91, 1.22) の3行後に The poor kitty (p.91, 1.25) と表記されている。また、2回目の that kitty の次の行に a poor kitty (p.93, 1.16) と表記されている。作品の流れからみると、この2回目に表れている a poor kitty は the poor kitty と描くことも可能なのに、あえて一般化して、イメージを一貫して提示するのを避けようとしているとも考えられる。このことから、ヘミングウェイは猫のイメージの不安定さを意図していると考えられる。

## II. 「妻」の望むものとは

作中でメイドはイタリア語で “Ha perduto qualche cosa, Signora? (92)” と言っている。これを英訳すると、Have you lost something, Madam? となる。この文から後の10行、つまり “I suppose so,” said the American girl (92). までの間の時間経過はメイドのイタリア語での質問の文が表すように、過去のある時点で何かをなくしたまま現在に至っている。語り手の視線が、何かをなくした過去の the American girl から現在の the American wife へ途切れることなく継続している。つまり妻のことを、語り手が、妻の「過去」の姿 the American girl、そして the girl から、現在の the American wife あるいは the wife を時間が経過することで暗示するためだと考えられる。

「過去」の妻の姿を暗示するためだと考えられる理由は、この作品中で使われている動詞 want の使われ方にある。want という語はこの短編の中で、都合17回使われている。さらに詳しくみていくと現在形が11回、過去形が6回使われている。この6回の過去形の wanted の主語は、一つの例外を除いて、すべて I (=妻) である。その一つの例外では She liked the way he wanted it to serve her (93). と、主語が he であるが、ここで wanted と過去形が使われているのは、liked と時制の一致のためであり、例外的な状況だと考えられる。従って、今回の考察の対象から外しても良いと思われる。

同じ行に2回も表れるのを含めて、その5回表れる wanted (p.92, l.30; 31. p.93, l.4; 15) は、例えば、“I wanted it so much,” she said. (93) のように、said と共に用いられている。つまり、妻が wanted したのは said よりも「以前の過去」だったことを表している。妻の「以前の過去」の願望を表しているのだ。wanted が使われている場面では、先に指摘したように妻が girl と表されている。だから girl は、wife より「以前の過去」の妻の姿を暗示していると考えられる。そして「以前の過去」における妻の願望が表されている場面で、以下の語りがある。

As the American girl passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme importance. (93)

この文を素直に解釈してみると、次のようになる。宿の主人は、当地の文化と違うアメリカからやってきた女性を、きちんと世話をしようと心がけている。宿の主人のその計らいや動作により、その主人の視線を感じて、女性は自身の中に「とても小さなそして緊張感」(=very small and tight) を感じる。宿の主人の振る舞いが、アメリカ人の妻に自分がとても小さなも

のであると感じさせる。すなわち、ヨーロッパのような長い歴史のないアメリカからやってきたことを感じさせるのだ。また同時に宿の主人の対応に接して、妻は自分がなにか偉くなったように感じたのである。宿の主人の振る舞いが、何か自分がとても supreme importance な存在であるように感じさせたのである。そうした感覚が tight と表現される。つまり、宿の主人の部屋の前を通り、2階にある自分の部屋に戻るほんのつかの間の妻の心の動きを描いた部分と解することが出来る。

しかしヘミングウェイの「氷山の理論」を考えると、very small and tight が別のものにみえてくる。それは kitty という語の使われ方からもわかる。kitty という語の使われ方をみると kitty はすべて妻の会話の中に表れる。その場合主語は the American wife、the American girl、the girl そして the wife の4つある。まず作品の最初で妻 (=the American wife) が窓から見つけた猫を kitty と2回言う。次にメードとの会話の中で妻 (=the American girl) が kitty を欲しいと1回言う。この文の前の妻は the American girl と表されている。それがこの文の中では妻は the girl と表されている。そして、この文の後に次のくだりがある。夫が妻 (=the American girl) に “Did you get the cat?” (93) という問いに対して妻 (=the girl) は2回 kitty を使っている。その後、夫との会話の中に kitty は2回使われている。このように執拗に妻はメードにそして夫に kitty が欲しいと言う。

妻の「以前の過去」であった girl が wanted していたもの、その「願望していたもの」が kitty である。そして girl は自分の中で very small and tight なものを感じるのだ。つまり girl は受胎を感じたのである。ヘミングウェイがこの作品で、want の過去形を使うことにより、very small and tight という受胎を感じ取ったアメリカ人の女性を表現したのだ。この文について、今村楯夫は次のように指摘している。

「小さな固いもの」が一体何なのかは不明である。子猫を膝の上に抱いてみたい、という願望と重ねて、あるいは子猫に執拗にこだわる心と重ね、さらにさまざまな「もの」を欲する心情も重ねて二つの仮説が成り立つ。一つは、即物的に「小さな固いもの」を胎児とみなし、この女性がすでに妊娠しており、それを自分の内に感じ取ったのだ、と考える説である。もう一方で、全く逆に、「固いもの」を感じたのは、あくまで彼女の妊娠願望の投影であり、子猫に対する異常なこだわりは、その願望の無意識的な代償行為を裏付けるものである、という説が成り立つ。(この妊娠説と妊娠願望説は、これまでも多くの批評家が問題とし、大きく意見の分かれるところであるが、いまだ決定的な論は出ていない。)

(『猫と女たち』120)

二つの仮説のうち、今村は「小さな固いもの」が胎児である(120)と指摘している。妊娠願望という二つ目の仮説については、高野泰志は妻の髪の毛から言及して以下のように述べて

いる。

髪を長く伸ばしたいという女性の願望は、妊娠したいという隠れた願望の発露であると考えられる。つまり髪の長さが妊娠能力を指し示しているのである。「少年のように刈り込まれ」た髪型ではなく、もっと女性らしい髪型をすることで、もっと女性になりたい、自分が女性であることのジェンダー・アイデンティティを再認識したいという願望を、すなわち妊娠して子供を生みたいという願望を表すことになるのである。(234)

上述したようにこの文を子細にみてゆけばやはりここにも確定のできない不安定さがある。作品からは素直に読み取れることと、妊娠あるいは妊娠願望ともとれるように、作品に潜む不安定さが表れるのだ。また、妊娠ということは肉体的にも精神的にもかなり不安定な時期なので、「アメリカ人の妻」や「アメリカ人の若い女性」という不安定な表現で、妻を表したのだ。この点においても作者ヘミングウェイが不安定さを意図していると考えられる。

### Ⅲ．史実から透けて見える不安定さについて

この作品にインスピレーションを与えたと思われる行動を作家ヘミングウェイはしている。ヘミングウェイは、イタリアのラッパロ（Rapallo）のホテルに妻のエリザベス・ハドリー・リチャードソン（Elizabeth Hadley Richardson）と投宿していた。時期は1923年2月18日頃である。ヘミングウェイはイタリアの雨が降っているホテルに、実際にその妻ハドリーと滞在していたのである（*Letters* 79）。

雨のホテルのイメージと作品の持つイメージが醸し出すじめじめとした雰囲気と、薄暗く感じるものは、ヘミングウェイがガートルード・スタイン（Gertrude Stein）に宛てた手紙の中の *The weather is good today after seven days muggy*（*Letters* 79）.ということからも、そして、また、このホテルは当初ホテルとして建設されたのではなく、中世の男子用の修道院（monastery）を改装してホテルとして利用されていたことから想像できる。中世の修道院は、また、当時の医療機関の役目も兼ねていた。高橋保行によると、修道院は「社会福祉の面を初めとして社会生活改善に役立っていた。教育施設や病院設置などだけではなく、変わったところでは、修道院が刑務所の役割を果たした」（105）ということである。この短編「雨の中の猫」はまさしくそのような場所と雰囲気が舞台になっていた。

フランシス・スコット・キー・フィッツジェラルド（Francis Scott Key Fitzgerald）宛に書いた次の様な書簡がある。その手紙の日付は1925年12月24日である。

Cat in the Rain wasnt about Hadley. I know that you and Zelda always thought it was.  
When I wrote that we were at Rapallo but Hadley was 4 months pregnant with



Bumby. [...] Hadley never made a speech in her life about wanting a baby because she had been told various things by her doctor and I'd — no use going into all that. (*Letters* 180)

この書簡の中で、ヘミングウェイはこの宿に滞在していた時のハドリーは妊娠4か月だったから、この作品の中のアメリカ人の妻はハドリーではないと伝えている。また、ハドリーは子供を欲しがったとは言っていないと言っている。作家が言うことをそのまま信じることもできないが、仮に作者ヘミングウェイの言葉通り、作品の中のアメリカ人の妻がハドリーではないとしてみよう。ヘミングウェイはフィッツジェラルドに、作品の中で描いた女性は、ハドリーと共にイタリアに旅行していた時期と妊娠の期間が合わないので、ハドリーではないと否定しているわけである。あるいは、また、作品のアメリカ人の妻は妊娠していないから、ハドリーではない、と言っていると解釈することもできるのである。このあたりにもやはり不安定さが見て取れるのである。

ところで、ハドリーの受胎時期について考えてみると、ヘミングウェイとハドリーの第一子が1923年10月10日に生まれていることから、1923年1月の第1週または第2週あたりであったことが計算される。作品の題材になったイタリアへの旅行が1923年2月18日頃である。つまりヘミングウェイの第一子の誕生日から逆算して、おおよそ考えられるその頃の妊娠時期はおそらく妊娠2か月弱（7週前後）であると推測される。産科の医学書によれば、医学的に妊娠（妊娠期間）、出産について次のように定義されている。

医学的には WHO の提案する方法が用いられており、これによれば最終正常月経第1日（開始日）を起算点とし、すべて「満」で計算します。[...] 統計データによると、ほとんどの妊娠は $280 \pm 15$ で出産に至ります。したがって、正常妊娠維持期間を280日とし、これを10で割った28日を妊娠歴の1か月と定めます。つまり、分娩予定日は正常月経第1日の280日後（満280日）、妊娠40週0日となります。（可世木 11）

このようなことからヘミングウェイがフィッツジェラルドにハドリーは妊娠4か月なので、作品の中のアメリカ人の妻はハドリーではない、と否定しているのは、先ほどの計算からもわかるように、おそらくヘミングウェイの妊娠期間の計算の誤りか、あるいはあえて不正確な妊娠期間を意図的にフィッツジェラルドに伝えたのではないかということが考えられる。

いずれにせよ、ヘミングウェイがフィッツジェラルドにハドリーは当時妊娠4か月だったと言うことにより、作品中のアメリカ人の妻とハドリーとを切り離して考えることをフィッツジェラルドに求めていることは間違いない。そしてヘミングウェイのハドリーの妊娠期間の計算の誤り、あるいは意図的に不正確な妊娠期間を伝えたとしても、フィッツジェラルドには意識

を切り離すように仕向けているにもかかわらず、ヘミングウェイは自分の意識の中で作品の中のアメリカ人の妻と妊娠を結びつけていることから、この作品の中のアメリカ人の妻は実は妊娠していたということを言外に認めていることを読み解くこともできるのだ。その根拠としては、あえてハドリーが妊娠4カ月だからと否定していることと、ハドリーは「子供を欲しがったこと」がないと、ヘミングウェイが語っているからである。つまり、ヘミングウェイの意識の中では、作品中のアメリカ人の妻と妊娠とは結びついているからだとも考えることもできる。ひるがえって作品のアメリカ人の妻が妊娠していないと考えると、前述の「以前の過去」における妻の願望が表されているとも考えることができるのである。フィッツジェラルドへの書簡の中で、ハドリーは妊娠4カ月なので、作品の中の女性はハドリーでないということにより、あるいは前述した「以前の過去」における妻の願望を表すことにより、作品の中のアメリカ人の妻は、実は妊娠していたのではないかと思わせるように、事実と願望を混在させることにより、作者ヘミングウェイは意図してより一層不安定さを表現したと考えられるのである。

#### IV. 終わりに

作品の後半部分では、猫を手に入れることをひたすら願望する妻と夫がいさかいになる。そこへメイドが支配人から持って行くように言われた三毛猫 (a big tortoise-shell cat) が届くわけである。あれほど猫を欲しがっていたアメリカ人の妻の前に三毛猫という形で物理的に姿を表したわけである。なぜ、a cat、the cat、a kitty、あるいはthe kittyではなく、a big tortoise-shell catなのであろうか。アメリカ人の妻が欲しがっていた猫を、簡単にa catとすればよいはずである。また、これまでに出てきた猫 (cat) はa cat、the catであり、bigという形容詞が付いていない。a big tortoise-shell catでbigが付いているということは、前述した猫の特定化についても、最初に出てきた猫と同じ猫だと特定化することが困難であることが、ここでもわかる。最後になぜヘミングウェイが最後にa big tortoise-shell catという語を使ったのか考えてみたい。

ラッパロに宿泊当時、既にハドリーは妊娠しており、ヘミングウェイもその事を知っていた。しかしヘミングウェイは自分の子供を望んでいなかったのだ。メイドがその三毛猫を持ってくるときのしぐさが、She [maid] held a big tortoise-shell cat pressed tight against her and swung down against her body (94). と語られている。妊婦のようにあたかも重い荷物を自分のお腹のところで抱えて持っているような格好で、メイドがa big tortoise-shell catを妻のために持ってきた。その語りからは、いかにも妊婦が想像できるのだ。さらにヘミングウェイは、この短編の最後で、“Excuse me,” she said, “the padrone asked me to bring this for the Signora” (94). と三毛猫をthisと表現した。メイドが支配人から携えられた三毛猫を最後には、catあるいはkittyと言わないで、thisと表すのだ。もちろん英文の構造の中でこのthisは表面上特異な表現ではない。ただ、作者ヘミングウェイの理論から推測すると、this cat、



this kitty あるいは this tortoise-shell cat とは表現していないのは、また、メードが宿の主人から頼まれた三毛猫を、まるでなにかの物体でも扱うような表現で終わっているのは、そこに様々な解釈ができる余地をとに残しているのである。言い換えれば読者に解釈を委ねているとも考えられるのである。この短編の大きな特徴がそれである。

a tortoise-shell cat は三毛猫である。tortoise の原義をみると、中期フランス語 tortues (カメ、tortue の複数形) より発生し、その意味の一つに「悪魔のような動物」がある。ハドリーの妊娠がわかったときのヘミングウェイの正直な感想を、フィリップ・ヤング (Philip Young) は Then, too, Hadley was “enceinte,” in the phrase of the time; according to Miss Stein the young writer was a little bitter about this (138). と推測している。とすれば、これからのいろいろな経験をして、様々な作品を書こうと思っていたその当時のヘミングウェイは生まれてくる子供を、執筆の邪魔になり全くいらぬもの、そして、不要なものということで、「悪魔のような動物」として扱ったと考えることもできるのである。当時ヘミングウェイは23歳、ハドリーは31歳だった。ハドリーは十分に子供を産んでよい年齢であるが、ヘミングウェイは自分が子供を持つには、まだあまりにも早すぎると考えていたと推察される。これから生まれてくる子供が、創作、執筆活動に支障をきたすので「悪魔のような動物」とも見なし、そして this という語でその気持ちを表し最後まで読者に解釈を委ねたのである。つまりヘミングウェイは生まれてくる子供を、この原義「悪魔のような動物」を入念に作品の中へ埋め込んだとも考えられるのだ。それはこの作品のタイトルに始まり、猫の特定化を阻む数々の表現の変化、妻の願望を作品の中で何度も繰り返すことなどにより表現されている。また、作品の視点の配置を俯瞰的、アメリカ人の妻、メード、宿の主人、そして夫というように、いかにも錯綜するように様々に配置したのである。作者ヘミングウェイは作品に入念に埋め込んだ表現により、言葉を変えていえば、8分の7を隠すことによって逆に浮かび上がり、醸し出される作品の醍醐味を読者に味わわそうとしたのである。我々読者はその幾重にも隠された不安定な8分の7を推理しかたち作らなければならない。作者ヘミングウェイは、読者がより面白くこの作品を読むことができるように、緻密に計算された表現を配置したのである。ヘミングウェイにとって猫という最も好きな動物ではあるが、ここでは三毛猫という形で現れた猫を執筆の邪魔になり全くいらぬもの、不要なものとしてのメタファーとして使い、最後まで不安定なまま残したと考えられるのだ。

#### [Works Cited]

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Curtis Brown, 1969. Print.  
 ----. *Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton: Princeton UP, 1990. Print.  
 Hagopian, John V. “Symmetry in ‘Cat in the Rain.’” *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. J. Benson. Durham:

- Duke UP, 1975. 230-32. Print.
- Hemingway, Ernest. *Death in the Afternoon*. 1932. New York: Scribner's, 2003. Print.
- . *Ernest Hemingway Selected Letters 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981. Print.
- . *In Our Time*. 1930. New York: Scribner's, 2003. Print.
- Lodge, David. “Analysis and Interpretation of the Realist Text: Ernest Hemingway's ‘Cat in the Rain.’” *Poetic Today* 1.3 (1980): 56-85. Print.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. New York: Pennsylvania State UP, 1966. Print.
- 浅若裕彦 「『雨の中の猫』の中の三毛猫」『大谷学報』87巻2号(大谷大学、2008年)18-29頁
- 今村楯夫 『ヘミングウェイと猫と女たち』(新潮社、1990年)
- . 『ヘミングウェイの言葉』(新潮新書、2005年)
- 大沼雅彦 「『雨のなかのネコ』の文法的一面」『日本語学』6巻11号(明治書院、1987年)83-92頁
- . 「『雨のなかのネコ』の文法再論」『研究年報』34号(奈良女子大学、1990年)48-66頁
- 可世木久幸監修 『STEP 産婦人科②産科』(海馬書房、2004年)
- 高野泰志 『引き裂かれた身体』(松籟社、2008年)
- 高橋保行 『ギリシャ正教』(講談社学術文庫、1980年)
- 古樋直己 「“Cat in the Rain” に隠されたもう一つのアイロニー」『津山工業高等専門学校紀要、45』(津山工業高等専門学校、2004年)91-95頁

(さかた まさかず 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導教員：野間 正二 教授)

2014年9月29日受理